

こころがホッとする居場所 はありますか？

～ひきこもりの方への向き合い方～

多摩市子ども若者育成支援事業

2022年10月1日（土）14:00～16:00

@永山公民館ベルブホール

公益社団法人青少年健康センター 茗荷谷クラブ
井利由利



自己紹介

(公社)青少年健康センター【茗荷谷クラブ】にて、ひきこもりの若者の居場所の提供、段階的社會参加支援と心理相談との相補的支援、家族支援を30年間続けてきた。

その間、思春期精神科クリニック、大学学生相談室カウンセラー、東京都スクールカウンセラーを務め、東海大学大学院非常勤講師、世田谷区若者総合支援センター「メルクマールせたがや」施設長を歴任。

(公社)青少年健康センター理事。副会長。茗荷谷クラブメンタル部門相談室代表。文京区「STEP」代表委員。西東京市子どもの権利擁護委員。葛飾区教育委員会いじめ対策委員会委員。東京都青少年問題協議会第30期、31期、32期専門委員。東京都ひきこもりに係る支援協議会委員。

The background features a white page with several colorful circles and dashed lines. In the top left, there is a large teal circle with a white center, a smaller teal circle, and a dashed teal circle. In the top right, there is a large lime green circle, a smaller green circle, and a dashed green circle. In the bottom left, there is a large green circle with a white center, a smaller yellow-green circle, and a dashed yellow-green circle. In the bottom right, there is a large yellow circle, a smaller orange circle, and a dashed yellow circle. A large dashed grey circle is also present, partially enclosing the text.

本日のお話し

1. ひきこもりの基本的理解
2. 本人との向き合い方
3. ひきこもりのご家族の方へ
4. 居場所の事例紹介

The background features several decorative elements: a large orange ring with a dashed red inner circle in the top left; a large teal ring in the bottom right; a large teal circle with a dashed teal outline in the top center; a large green circle with a dashed green outline in the top right; a large yellow circle with a dashed yellow outline in the top right; a large green circle with a dashed green outline in the bottom left; a large teal circle with a dashed teal outline in the bottom right; and several smaller solid circles in orange, green, yellow, pink, and teal scattered throughout.

1

ひきこもりの基本的理解

ひきこもり者の基本的理解



ひきこもりについて思うこと

・ひきこもりへの偏見

怠けているだけ

甘えてる

怖い

犯罪予備軍

お金があるからひきこまれる

親が甘やかしている

などなど…これらは全部間違い。

→会ってみればわかるのに。「まじめでいい人たちばかり」

→ひきこもりへの偏見をなくすことが重要。

社会の偏見があるから自己スティグマ(境泉洋氏)の解消ができずにいる。

ひきこもりの社会的理解

・ひきこもりは状態像

100人100様 115.4万人いれば115.4万通りのオーダーメイドのかかわりが必要となる。
背景はばらばらであることが前提。

ひきこもり(15歳～39歳 3,445万人)
推計54.1万人(1.57%)
若者の生活に関する調査【2016内閣府】

中高年のひきこもり(40歳～64歳、4,235万人)
推計61.3万人(1.45%)
生活状況に関する調査【2019 内閣府】

医療
教育
福祉
就労

通院
ケースワーク
カウンセリング
居場所
社会参加準備
就労支援

若者を取り巻く社会

- ◎ 高卒の39.3%、大卒の31.8%が3年以内に離職(厚生労働省, 2018)
<https://lab.jinjib.co.jp/archives/745>
- ◎ 依然高い非正規雇用
- ◎ 「本気で自殺を考えた」4人に1人。4人に1人が周りの人を自殺で亡くした経験がある。
(日本財団第4回自殺意識調査2021年4月 有効回答数2万人)
- ◎ 自殺未遂経験者は、6.2%。2.1%が1年以内に自殺未遂経験あり(同上)
- ◎ 本気で自殺を考えた人の7割が自殺を考えた時に誰にも相談していない(同上)

自殺念慮、自殺未遂ともに15歳から20代のリスクが高い。若者問題の大きな課題は、若者実像を把握しにくいことである。

なぜこんなに生きづらいのか？

- ◎ 不満を持っている若者は減っている。
不満に根ざした問題行動↓
- ◎ 不安に根ざした問題行動↑ ひきこもり, 自傷行為等の内閉化。

なぜ不満を持っている若者が減っているのか？



自己責任感、能力主義で引き受けてしまうので、周りのせいにはしない。
かつての非行少年はある意味仲間を組み、自立していた。
どう社会的自立につなげていくかが大きな問題。

調査や報告でわかりはじめたこと ～精神医学的な診断から～

●ひきこもりの診断と支援方針に基づいた分類(近藤、2010)

＜第1群＞ **統合失調症、気分障害、不安障害**などを主診断とするひきこもりで、薬物療法などの**生物学的治療が不可欠**ないしはその有効性が期待されるもので、精神療法的アプローチや福祉的な生活・就労支援などの心理—社会的支援も同時に実施される

＜第2群＞ **広汎性発達障害や知的障害などの発達障害**を主診断とするひきこもりで、発達特性に応じた**精神療法的アプローチや生活・就労支援が中心**となるもので、薬物療法は発達障害自体を対象とする場合と、二次障害を対象として行われる場合がある。

＜第3群＞ **パーソナリティ障害(ないしその傾向)や身体表現性障害、同一性の問題**などの主診断とするひきこもり、**精神療法的アプローチや生活・就労支援が中心**となるもので、薬物療法は付加的に行われる場合がある。

The background features several overlapping circles in various colors: orange, yellow, pink, green, and teal. Some circles are solid, while others are dashed. A large, light blue dashed circle is centered behind the number '2'.

2

本人との向き合い方

ひきこもりとは？—支援現場から見えるひきこもり

○僕はここにいていいんですか？

- ・自分で自分が分からない
- ・まず人ありき
- ・主体性が剥奪されてきた

とんでもないことに会ってきたのに、多くの人にとんでもないことに会ってきたんだねと言ってもらえない。自分の感覚を信じられない。周りの人がどう感じどう考えているかで動いてしまう。自分の感覚は合っているんだ、それでいいんだと承認してもらいたい。それが続けば、いつも相手の承認を必要としなくてもよくなる。自分で抱えていけるようになる。

存在の不安

① 過剰なまでの規範意識



- べき思考
- 白黒思考
- グレーゾーンがない
- 「この動けなさは、どんなに苦しみながらも社会参加できている人には理解できるものではない」
- 「規範意識があって、それをクリアしなければいけないと思っていた。特に落ち込んでいる時、それが自分の意思なのか植えつけられたものなのか分からなくなる」
- 「落ち込むと背骨を抜かれた感じがする。そういう時に持っていた規範意識がバーっと出てきて大きくなる。でもそれは自分がやりたいことではないので、やってもやっても 天井がなく達成感もない。なんのためにやっているのかわからない」
- 「やっと遅刻できるようになりました」
- 「自分の言いたいことを言っているつもりだったけど、それは自分の気持ちではなかったかもしれない。自分の気持ちが分からなくて、こうあるべきをただ言っていただけかもしれない。形で行動してしまう。形で言うってしまう。それに気づいて呆然となった」
- 「人はみんな違って当たり前かと思うかもしれないけど、僕は本当にそのことがわからなかったんですよ」

②感情が出て来ない



- ◎ 感情はコントロールしなければならない。
- ◎ 否定的な感情を出してはいけない。
- ◎ 「まずこれを言っているのかな？と一度頭の中で考えてから言葉を出すので、自分の感情が分からないんです。それに、自分が話そうとするときにはもう違う話になっているので、結局黙ってしまいます」。

③人の目が気になる (極度の自信のなさの特権意識)



- ◎ 自己万能感を持った自分をだましたまし、偽って生きてきた結果、職場への不適應や、人間関係の挫折などをきっかけに、何かの拍子で破たんしてしまう。
- ◎ 「自分の手をどのようにしていますか？歩いている時」
- ◎ 「電車の中では座らないようにしています。前に人が座っているので、どこを見れば迷惑にならないのかが分からないので」
- ◎ 「人を信用できない。人を信用できないと多分社会に出て、就職とかしてもダメだろうって思うんです」

④コミュニケーション強迫



- ◎ 心を開く、閉じるが極端になってしまう。
- ◎ まじめな話ができるのに世間話ができない。
- ◎ 人に気を使うあまり、コミュニケーションが苦手と思い込んでいる。
- ◎ 「自分を100%出してしまうと受け入れてもらえない。相手が求めるようなキャラを100%目指そうとしてしまう。そうすると安心する、充実した感じ。でもしんどい。疲れます」

通底する「普通への囚われ」 ・・・世間体・社会的な価値観との葛藤



家族や社会の
価値観に縛ら
れている
「べき思考」

マニュアル的な社会化の方法だけを取り入れ、
社会的役割への過剰な同一化を進めようとして
行き詰まる

罪悪感は無気力を生む

◆親の期待に応えられなかった罪悪感

◆将来への不安ー「普通」へのこだわり、どうせ自分は何もできない不安は、

①危険を過大評価し

②自分の力を過小評価し

③周囲からの支援を過小評価したときに強くなる

♥ 「過剰に生きてきましたね」「べき思考へのとらわれは、苦悩を生み出します」「足りないのではなく、むしろ多すぎるのです」

想いこもごも

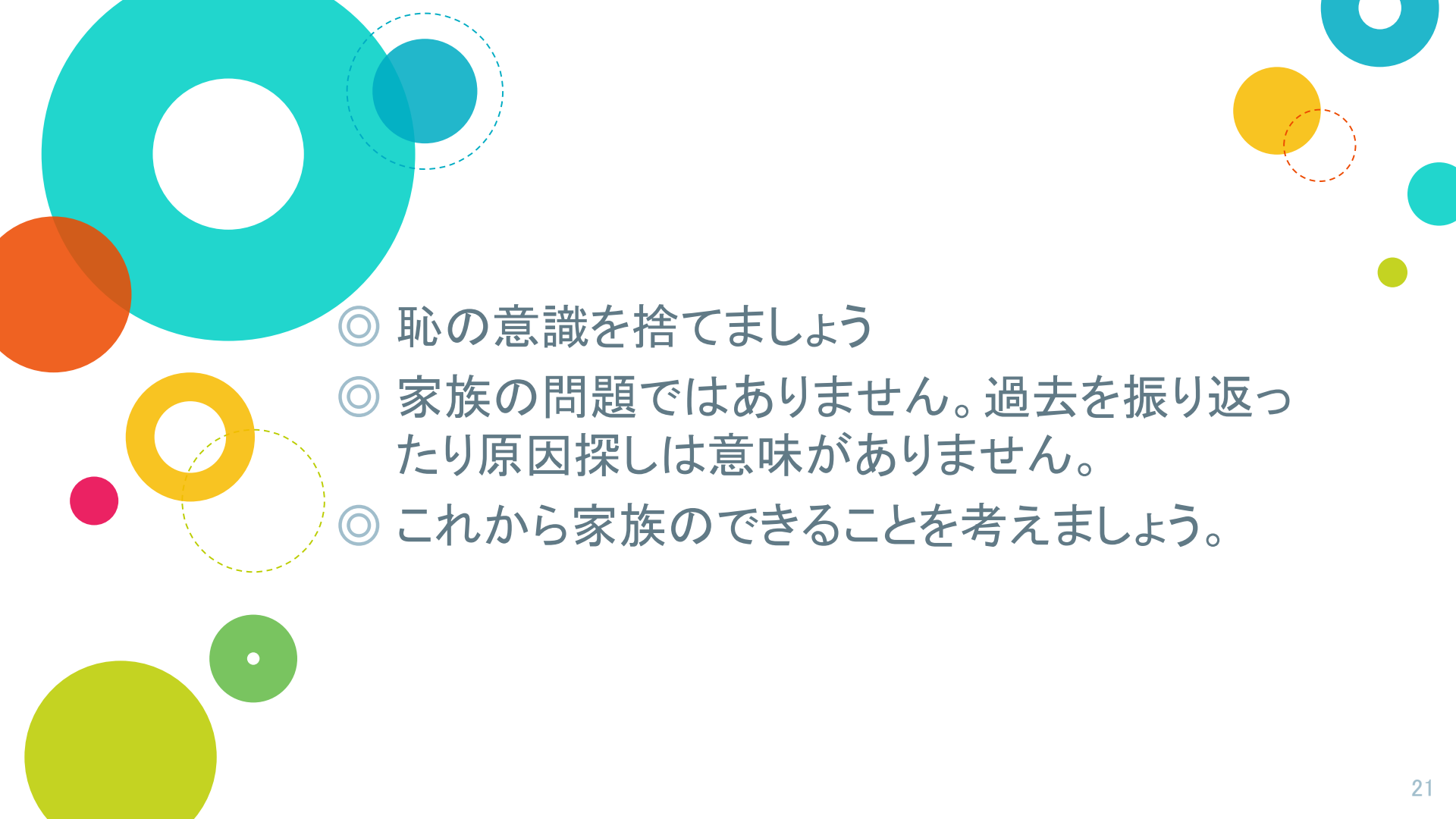
「ひきこまれる保障」と「社会参加できる保証」の両面が大切。
何よりも、主体的に選択できるように支援していくことが大切。

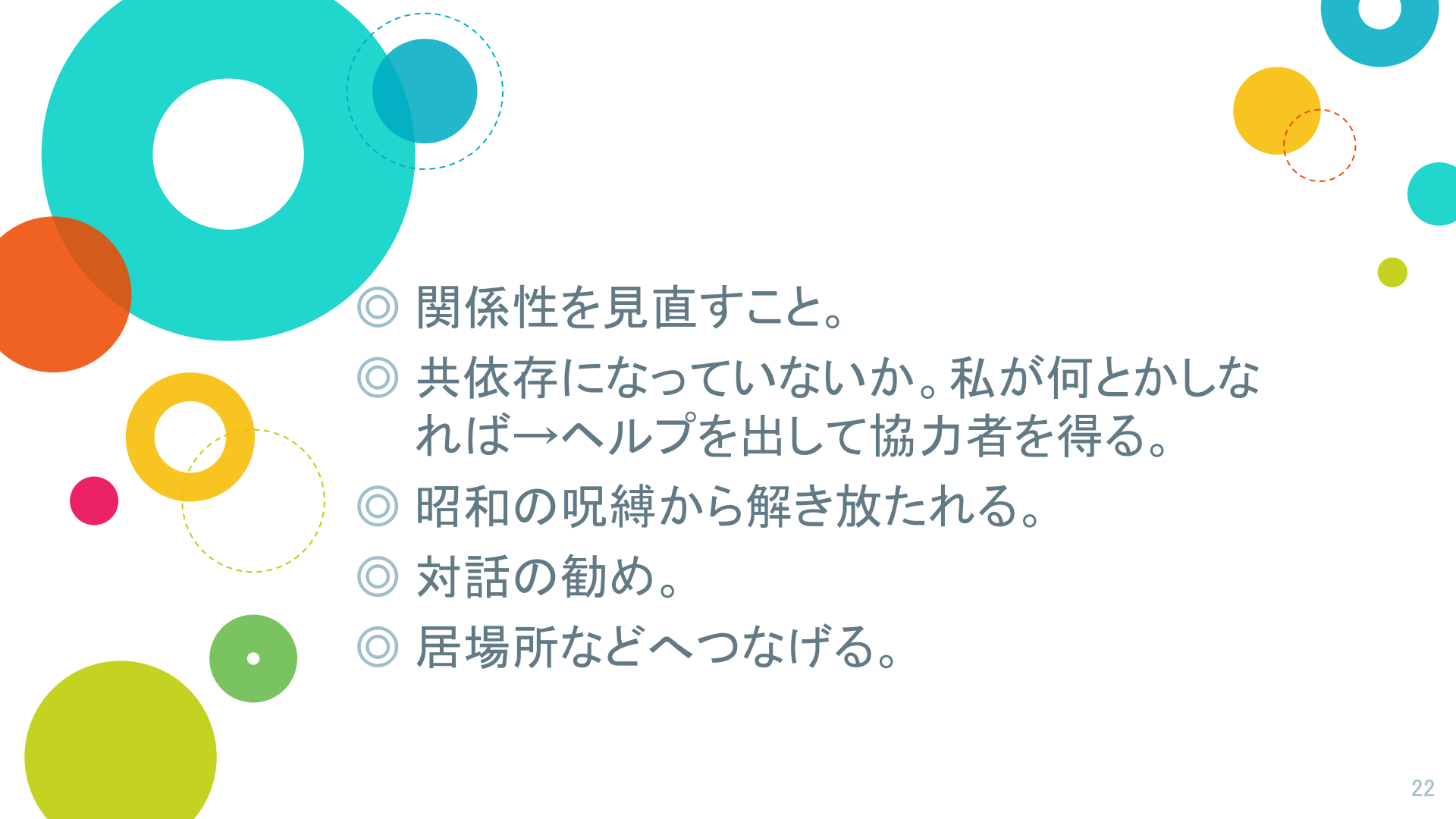
- ◎ 贅沢病、怠けなど根強い偏見がある。
- ◎ 理解してもらうのが難しい(本人もよくわからない)。
- ◎ ひきこもりは100人100様一人ひとりが違っている。
- ◎ 出たいのに出られない人が多くいるが本人がヘルプを出すことが少ない(出せない)。
- ◎ 複合的で複雑な背景を持つため、単一の支援機関では難しい。連携とネットワークづくりが必須。
- ◎ 背景はばらばらであることが前提。その人のニーズを聞き取ることから始めなければならない。
- ◎ ひきこもりは現代の若者たちの生きづらさを象徴し、社会に対し、警鐘を鳴らしている。
- ◎ ひきこもりは「見えない支援」。家族の力が大きく左右する。



3

ひきこもりの家族の方へ

- 
- ◎ 恥の意識を捨てましょう
 - ◎ 家族の問題ではありません。過去を振り返ったり原因探しは意味がありません。
 - ◎ これから家族のできることを考えましょう。

- 
- ◎ 関係性を見直すこと。
 - ◎ 共依存になっていないか。私が何とかしなければ→ヘルプを出して協力者を得る。
 - ◎ 昭和の呪縛から解き放たれる。
 - ◎ 対話の勧め。
 - ◎ 居場所などへつなげる。

家族のタイプ 関係性によるタイプ別

①叱咤激励する親と家族からもひきこもる本人

(本人:ひきこもり→家族;焦り・甘えてはいけない→家族;叱咤激励→本人;解ってもらえない→本人:ひきこもり。)

②自責的な親と他罰的な本人

(本人:お前のせい⇔家族;私のせい。本人は暴力・恫喝で支配。親は密やかであるが「自分が家族全体を支えている」という一種の万能感。)

③親子のひきこもり相互作用

(本人:問題に向き合いたくない⇔家族;自分が子供をきずつけてしまう。親が本人の体験をわかりすぎてしまう、傷つけてしまう不安が強い)

悪循環から脱却するために

- 悪循環のシステムから脱却するにはどうしたらいいのか？
- 原因を探るのではなく、どうすれば今の状況から抜け出させるか、今の状況から抜け出すのに家族に何ができるかを考える。
- ひきこもり個人の問題にとらえず、家族との関係性に着目する。

👉 ひきこもり本人は成長していくことを信じるのが前提

ひきこもりの家族理解 ～橋渡し不全～

➤悪循環を長引かせているもの

—「不安」や、「心配」と言いながら支配する【共依存】

母が「自立してほしいと望む反面、手放さないままに世話焼き・面倒を見続け」、本人は「不本意であり出たいが、出られないので家や家族にしがみつき、依存していなければやっていけない」という状況に陥ってしまっている。

♥子育ての責任は親の責任(適度な心の距離が取れない)

「親の問題」として批判される辛さ。恥の意識。

子どもの評価は親の評価

♥親の経験からの知見

自分の積み上げたやり方が正しい。

OR

親と同じ思いをさせたくない。

親が果たせなかったものを果たしてほしい。



対話の勧めー日常会話の難しさ

日常会話と言われても、難しいですね。

中学生くらいから子どもはほとんど親と話さなくなり、親子間の会話は減ってきます。大人になってしまえばなおさらです。

日常会話と言うとこんな感じでしょうか？

• 挨拶

「おはよう」「よく眠れた？」

• 食事の献立「今日何食べた
い？」ーランチョンテクニック

• 簡単な用事を頼む

ひきこもる子との日常会話＝コミュニケーションの悩みでよく聞かれるのはこんなことです。

- 何を話していいかわからない
- 話が続かない

この前提にあるのが、

- 何を考えているのかわからない
- 傷つけるのではないかと心配
で言いたいことが言えない

話す＝放す



- ◎ ひきこもりの人は、自分が何を感じ、どうしたいのかが分からないことが多くあります。なぜひきこもったのか？にひきこもり当初答えられる人はほとんどいません。わからなくなっていることがとても不安なのです。
- ◎ そしてわからないことに対する罪悪感も大きく、そんな自分には生きていく価値がないと思っています。
- ◎ 自分の分からなさやもやもやを話すことによって客観的に自分を見ることが出来ます。
- ◎ 結論は出ません。結論を求めるのではなく、対話をしていくこと、対話を続けることを目的とします。

耳を傾けること

- ◎ 聞いている間は反論や批判を控える
- ◎ 社会や他者への不信感や恐怖感、自分に対する不信感や確信のなさを語っていくことにより、過去から現在、未来へと向かう自分のイメージができてくる
- ◎ 感情を言葉にすることによって、パニックや衝動を避けることができる
- ◎ 内的作業と社会参加に向けた具体的な試行錯誤が回復のイメージ



感情に焦点をあてる



- ◎ カウンセリングの中で感情が蘇ってきて、それが言葉になると、スッキリする。

「感情を表現した言葉」や「背景に感情が含まれていそうな言葉」が話し手にとって重要なことであることが多く、その言葉を伝え返すと、「理解してもらえた」と感じられることが多い。

- ◎ 報告だけでなく、「どう感じたか」「どう思ったか」といった考え方を聞く。
- ◎ 心に潜んでいる葛藤を目覚めさせ言語化という理性的な操作を行うことで感情の渦に巻き込まれない客観的な視点を取り戻そうとする。極端な思い込みや攻撃に走るのではなく他者や外なる世界とのバランスの良い折り合いをつけようとする(by岡田尊司)。

ある事例

ある長期的にひきこもりを続けている青年。彼は悪いとは思いつつも自分の部屋に自分の食事を毎回お盆にのせて運んで食べている。ある時彼は父親に対して次のように言いました。『父さん。親は寂しいかもしれないけど、僕は自分の部屋へ行って食べます』と。それに対し、父親は『いいよ』と一言言った。

✓これは、「私は子どもの意志を尊重しています」ですか？

✓これは「対話におけるやり取り」ですか？

ここで父親が『めずらしいねー。昔はそんな事なかったのに、何があったのかね〜』

あるいは『そりゃ寂しいよ。だからなんで自分の部屋に持っていくのかね——』と思っているよ。でもその理由、まだ聞いてないものね』など会話の連鎖を作っていくのがよい。

親が愚痴を言うことによって親と子の間に心配が共有される。親の本音が伝わる。最初のような「いいよ」ではすべて後は子どもの責任。親は知らないよということになる。失敗してもすべてお前が責任を取れということになる。

神田橋條治先生の言葉(『ひきこもりの家族関係』より)



居場所などへつなげる

- ◎ タイミングが重要。
- ◎ 家が安心して居られる基地となる。
- ◎ ギブス固定期からリハビリ期へ。
- ◎ 心が安定してきている。
- ◎ 情報の提供。
- ◎ 最初の一歩を手伝えることを伝える。

ひきこもっている間を「意味ある時間」にする 「家族の関係性」は？

- ☑ 家族は支援の最良のパートナーである。
- ☑ 交流する仲間がいることの心強さ(視点を外へ向ける)
- ☑ ひきこもりへの理解—本人の世界に対する怖さ、不安を想像し、今は、生きるための生存手段としてのひきこもりであることを前提に理解する。
- ☑ べき思考、普通は～、からの脱却
⇒～に越したことはないけれど……



関係性の育ちを阻んでいるもの①

①親の側の抱える世代間伝達の悲劇

- ◎ 「されたこと」「されなかったこと」が繰り返される。
- ◎ 今の親と子の関係性のルーツが親自身の親との関係性にあることが多々ある。親自身の自分の親との関係性を見つめなおすことによって、新たな関係性を今の子と作り上げることができる。
- ◎ 親が自分の生き方を見つめなおし、自身の受けた親との関係性の中で欠けていた部分を補っていくことと、子どもが社会の中での人間関係に再び入っていくということが同時並行的に起こる。

関係性の育ちを阻んでいるもの②

②対話する関係性の喪失

- ◎ 対話は言語的交流に限らない。言葉にならない世界は圧倒的に大きい。言葉にならないしぐさ、顔色、行動から察すること、そしてそれを「私はこう思ったんだけど・・・」と伝えていく。

「受け入れる」から「受け止める」へ 一対話の出発点一

- ◎ わからないことはわからないままで良い。
- ◎ わかったつもりではなく、自分の中のわからなさを認めていく。無知の知。
- ◎ わからないことがわかることが対話の出発点で、そこからわからないけど、関係を改めて構築していきたいという姿勢がお互いを育んでいく。
- ◎ 本人の話を聴く。

関係性の育ちを阻んでいるもの③

③大人や親たちの間違った「子どもを守ろう」という姿勢

- ◎ 私たちはストレス＝悪いものと決めつけているところがありますが、人が成長するのにストレスはつきものです。
- ◎ 分かっているのにそのことを私たちが忘れてしまうのは、私たち自身の「傷つき」への恐れがあります。私たち大人がまず傷つくことへの自分の恐れを自覚し、しっかりと引き受けていかなければなりません。
- ◎ 自分の傷つきと子どもの傷つきを区別して考えるようにしなければなりません。
- ◎ 子どもを「守る」と「手放す」「本人に任せる」ことのバランスはいつも難しいところ。親であるからこそ見えない部分もあります。

The background features several decorative elements: a large orange ring with a dashed red inner circle in the top left; a large yellow circle below it; a small pink circle below that; a large green circle with a white dot in the top right; a smaller yellow circle with a dashed green border below it; a large teal ring in the bottom right; a large green circle with a dashed white border in the bottom left; and a small teal circle with a dashed teal border in the bottom right. A large, light blue dashed circle is centered in the upper half of the page.

4

居場所の事例紹介

茗荷谷クラブ(居場所)
私たちが大切にしていること



- ◎ 発達障害など病態で分けずに多様性を大切にする。
- ◎ 発達障害の方は人を求めている人が多い。受け入れられた経験の後に1人でいることの快適さを実感できる。
- ◎ その人のニーズを聞き取り、尊重される場
- ◎ 物理的、心理的に安心・安全の場
- ◎ 自由だが、集団の中で自分の存在を大切にされている体験ができる場
- ◎ さまざまな人、価値観に触れ、自分を見つめなおす場

茗荷谷クラブ(居場所)
私たちが大切にしていること



- ◎ 強制されず、成果を求めない。目的のある支援はなじまない。
- ◎ 担当制ではなく、メンバーが人を選ぶことができる。
- ◎ メンバー対スタッフがほぼ2対1。
- ◎ できる限り対等な関係性を保つ(支援—被支援ではなく)
- ◎ ボールを投げたら必ず受け取ってくれる、投げ返してくれる場。

茗荷谷クラブ(居場所)
私たちが大切にしていること



- ◎ 彼らの問題を問題とみなさず、ただ一緒にいようとする。
- ◎ スタッフそれぞれの個性が生きること。
- ◎ 多様なメンバーを変えるのではなく、そのままのあり方で共にいようとする。

「あなたのことをもっと知りたい」

- ◎ 結果としてメンバーに変化がみられるがそれは目的ではなく副産物である。
- ◎ 支援は総力戦。使えるものはなんでも試みる。

居場所って何？～メンバーの言葉から～

□“自分だけじゃない”

「ああ自分だけかと思っていた」

□“何かいいことがあるそう”

「ここが何かのきっかけになればと思って」

「ここに来ると気持ちが落ち着く、ほっとして休まる」

□“強制されない”

・・・「ここは何かを求められるということはない。それは不安でもあったけどとてもそこがよかった」

□“わかってもらえてよかった”

・・・「自分の話をここで聞いてもらえてよかった。今まで誰も耳を貸してくれなかった」

□“人の中にも自分は自由なんだって突然思ったんですよ”



居場所って何？～メンバーの言葉から～



□“反応がある・影響を与えられる”

・・・「自分の言葉が他の人にすっと入っていく。影響していく。それがたまらなく嬉しい」「ここは必ず言葉を反応してくれる。拾ってくれる。そこが安心」

□“普通に扱われる”“対等な関係”

・・・「普通に話しかけてくれる。普通な感じに扱われるのが自分としてはよかった。大変ね、大丈夫と言われていたら来なかったかもしれない(笑)」

「こんな楽しいこと今までなかった。こんな楽しいことを自分は経験してもいいのかなと思う」

「女の子同士で普通にお茶をしたかった。それがやっとできた」

「青春というものを感じたかった。漫画の貸し借りとか、弁当を一緒に食べるみたいに。それで演劇活動やってみてもいいかなと思った」

居場所にきて気づいたこと～メンバーの言葉から～

□ “こんなこと、こんな景色が好きだったんだと新しい自分を発見することができる。こんなことに興味を持っていたんだと自分が出てくる。それがとっても自分にとってのエネルギーになる”

□ “親を恨んでいたのはわかっていた。ただ復讐心でひきこもっていたことがわからず、それにはたと気づいた。自分の人生を棒にふるのがあほらしくなった”

□ “人生、母の言うとおりに期待に添うように生きてきた。

自分の何をしたいかなんて、そんなこと考えたこともなかった”

“母をよろしくお願いいたします”

□ ”（プログラムを）やるたびに気づくことがあって、真面目なところがあるがゆえに自分に厳しい。もう少し緩めてもいいのかな“



茗荷谷クラブってどんなところ？ ー居場所に来てよかったことー

- ◎ 安らげる場所、一息つける場所。自分を出せる。
- ◎ 会話をしないといけないということにとらわれ過ぎて、かえって不作法になる、ということに気づいた。
- ◎ 話さないことや沈黙が怖かったけれど、それはあっていいと思う。却って話題を作ろうとするものではないとすごく感じるようになった。
- ◎ 自然体で飾らず自分を出せるのはいい。こういうかかわり方もあるんだと分かってほっとする。自分の自由が手に入った感じ。いい気持ちになる。
- ◎ クラブは空母。
- ◎ クラブは窓。光が欲しいとき、風を入れたいとき、自分で開けたり閉めたりできる場所。
- ◎ 失敗とか成功の概念がないところ。
- ◎ 多様性が尊重される場所。



いろいろな選択肢を視野に

- ①居場所もそれぞれ特徴・雰囲気・文化がある
 - ☆「人」と「場」のマッチングがある
 - ☆他団体など見学すること・知っておくことも大事
- ②選択肢があることの大事さ
 - ☆「逃げ道」のあることの安心
 - ☆「選び取る」が本人たちの主体性の育ちを応援
- ③居場所支援にこだわらない、広い見通しを持つこと
 - ☆ゆるやかに生活圏を広げること

生きづらさを改善するのは「安心できる居場所」が見つかったとき

👉 一般社団法人「ひきこもりUX会議」による「ひきこもり・生きづらさについての実態調査 2019

- ◎ 興味深いのは、現在「ひきこもり」と自認する940人に、どのような変化によって生きづらい状況が軽減、改善したかを尋ねたところ、人によって生きづらさの変化がそれぞれ違うという前提があるとはいえ、「安心できる居場所が見つかったとき」と回答した人が42%超と最も多かったことだ。
- ◎ 一方で、生きづらい状況が軽減、改善したとは思えない人は、「就職したとき」が87%、「家族関係が修復したとき」が86%、「新しい人間関係ができたとき」も75%に上り、従来の「ひきこもり支援」の価値観を覆す結果がエビデンスとして初めて裏付けられた格好だ。

(ダイヤモンドオンライン池上正樹より)

ひきこもりの若者たちは不透明で時には過酷な思春期を過ごしたため心身の安全を保つために手に入れた防衛の術によって主体性を剥奪され、他者に左右されずに人間関係を自らが選ぶということができずにきてしまった。

主体性が育まれ、個性的で望ましい生き方が実現できるように(倉光修2021)



私たち支援者と利用者が目指すもの

- ひきこもりを存在論的不安の観点から理解。実存的疑問に向き合い、その答えを与えるという作業を内側で行っている。それは、全面的に個々の当事者に任されるべきもの。
- 生きることへの覚悟。どこかに回復というゴールがあるという想定が逆に当事者を追い込んでいる。「こういうの抱えたまま生きて行くもんなんだな」
- 生きる/生きられないという水準の葛藤。生きることを覚悟するといった意思を認めること。(石川良子 2007)

私たち支援者と利用者が目指すもの

- 社会復帰には『職業の座を獲得すること』と『“世に棲む”棲み方、根の生やし方の獲得』の二つの面があると述べ、後者の重要性を伝えている。(中井久夫 2011)
- 利用者自身の社会とのつながり方、利用者が納得する形で社会の中で定まった位置を獲得することを探索していくことが大事である。
- どう生きればいいのか？の問いに答えるためには、様々な体験が必要となる。そういった体験をさせてもらえなかった彼らにつながりや広がりのための体験が必要となる。
- 青春の再体験
- 分からない疑問にまっすぐに向き合ってくれる場・人





● ご清聴ありがとうございました。

茗荷谷クラブ
TEL 03-3941-1613
Mail club.myoga@gmail.com